中部の教育

新学長に聞く

教育ルネサンス

中京大学　北川　薫学長

時代に対応し学部を改組
高まる総合大学のメリット

――大学全入時代の到来は、入試にどんな影響を及ぼしたのでしょう。

来るべき時が来たという感じです。幸い本学では梅村清弘総長・理事長を中心に、対応策を練ってきたこともあり、18歳人口の減少率ほど志願者は減りませんでした。大学としての長期戦略が、多くの高校生、受験生の支持を得たと思っています。

――長期戦略とは。

私が中京大の教員になった30年前には4学部だけでしたが、今では11学部あります。多様化、複雑化が加速する時代に、より実践的にアプローチしようと、大きな学部を分割する形での学部増や改組を続けています。2005年度には商学部を総合政策学部に、06年度には情報科学部を情報理工学部に、07年度は社会学部を現代社会学部に改めるなどしました。入学定員は4学部時代の2160人に対し、11学部でも2790人とそれほど増えていません。学生と教員との距離をできるだけ小さくし、教育の密度を高めることができました。例えば文学部の学生も経済学部など他学部の講義を受けることができるなど、総合大学としてメリットも高まりました。

――キャンパスでは女子学生の多さも目立ちます。

学生1万3000人のうち、3分の1が女子学生。女子学生が多い南山大が5000人ですが、中京大も4400人。国際英語学部、心理学部など女子の受験生が選びやすい学部が誕生したこともあります。30年前と比べ隔世の感です。

――入学式では、どんなことを訴えましたか。

壇上から見渡して、第一に、学生たちの目つきの鋭さを感じました。式辞ではアジアを始め、世界全体が大きく動いている時代に対応できる学力をしっかり身につけ、友達をたくさんつくってほしいことなどを訴えました。「ジコチュー」（自己中）という言葉を使い、「個人の世界に浸る〝自己中〟では生きていくのは不可能。いろんな友達をたくさんつくることで、自分が確立できる」と。

――式辞では言い尽くせなかった点もあるのでは。

大学に来れば楽しいことを実感し、大学を徹底的に活用してほしい。特に総合大学には社会のひな型ともいうべき情報が集まっており、例えば、私の「スポーツ生理学」の講義を受講したとしたら、遠慮なく質問に来てほしい。授業では割愛した、私がかかわる生活習慣病対策や、タイでの体力測定などの研究成果も紹介できる。高い授業料の元を取るくらいの気持ちで、大学に滞在する時間を長くし、大学の持つ機能を利用し尽くしてほしい。90分授業は、1回5000円分に相当します。授業をさぼってアルバイトをするのなら、そういう損得計算もしっかりしてほしいですね。

――今年の入試で東京や関西の大手私大が続々と名古屋に試験会場を設けました。名古屋が〝草刈り場〟になる心配もあるのでは。

ネガティブにとらえるのではなく、名古屋の魅力をアピールすることで、逆に受験生を呼び込めるのではないかという期待も持っています。トヨタを中心としたものづくりとしては、中京地区は大変な土地柄ですし、経済も活発です。東海地方と北陸を結ぶ高速道路のネットワークも整備され、人の流れも変わってきます。名古屋の大学で学ぶことの魅力やメリットを生み出すため、同じ地域の大学同士の連携などの仕掛けができないかとも考えています。

（聞き手・中村康生）

東京大学教育学部卒。同大大学院教育学研究科体育学博士課程中退。教育学博士。同大教育学部助手を経て中京大学体育学部講師、助教授、教授。体育学部長などを歴任。専門は運動・スポーツ生理学など。名古屋市出身。61歳。